視点

建設的な対話を深めるための アナリストの役割とは

日本IR協議会　専務理事
佐　藤　淑　子 CMA

上場企業のIR意欲が高まっている。日本IR協議会主催のセミナーや意見交換会の申込者数は、前年度比おしなべて２割から３割増えており、最近の潮流や他社の活動を学ぼうとするIR責任者や担当者が目立つ。コーポレートガバナンス・コードが導入されて１年余がたち、株主・投資家との対話を深める機運が高まった表れといえる。

IRは「投資家向け広報」と解釈されているが、それは活動の一部分にすぎない。重要なのは、情報開示によって経営の透明性を高め、対話を機に企業価値向上を推進するところにある。実際、IRを通じて資本市場の声を聞き、それを経営に生かす企業経営者は少なくない。東京海上ホールディングス会長（日本IR協議会会長）の隅修三氏は「IRは、投資家と企業が信頼し合い、建設的に話し合える関係をつくる活動。経営者は戦略の説明と実行、投資家は中長期的な姿勢でのアドバイスという役割を、自覚と責任をもって果たすべき」と述べている。

IRが本格化し始めた2000年代初頭、IR責任者とともに投資家と企業との接点づくりを担ったのがアナリストであった。投資家と企業経営者が向き合うには、お互いの立場を理解することが重要である。アナリストが間に立って、企業には経営の合理化などに対する投資家の見方を、